HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子育てサークルの解散要因に関する研究：活動の経緯と成員の意識に注目して
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 93, 197-223
Issue Date	2004-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.93.197
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28932
Type	departmental bulletin paper
File Information	93_P197-223.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀要 第93号 2004年6月

子育てサークルの解散要因に関する研究

―― 活動の経緯と成員の意識に注目して ――

品川 ひろみ*

A Study on Factors for Dismissal of Child-Care Groups

Hiromi SHINAGAWA

【要旨】本研究は公的機関を結成契機とし活発な活動を展開していたサークルを対象に，子育てサークルの解散に関する要因と，解散の性質がどのようなものであったのかという2つの課題について検討することを目的とした。

その結果，以下のことがあきらかになった。まず1つ目の課題であるサークルの解散要因についてである。サークルの解散は時間的な経過によって子ども親それぞれのサークルへの欲求が低下したことが根本的な要因として存在しているが，欲求の低下は，企画運営を通しての困難な経験や，リーダーを含めたメンバー間の交友関係，第二子が加わることで生じる行動の制約など様々な要因が複合的に影響している。

次に2つ目の課題である解散の意味については，彼らの解散後の生活を見ることであきらかにされた。元サークル成員は解散後も交流を続けている。またサークルでの様々な経験をポジティブに捉えていた。さらに彼らの中には幼稚園や他のサークルで新たな活動をはじめた者も多い。これらのことからサークルの解散の意味を考えると，単なる活動のあり方に問題が生じた為の解散としてネガティブに捉えるよりも，当初の目的を達成し，個人がエンパワーしたための解散であり，いわば発展的な解消として捉えることができる。
【キーワード】子育てサークル，子育て支援，解散要因，発展的解消

はじめに

近年，少子化や子育て困難の問題が顕在化するなか，子育てを家庭の中だけでなく，地域でおこなうために，子育てサークルが多数結成され，多様な活動を展開している。子育てサークルとは，子育て中の親たちが子どもを連れて集まり，子ども同士遊ばせながら，学習や情報交換をしたり，運動会やクリスマスなどの行事を共同で実施したりするグループであり（厚生省1999：170-1），ヴォランタリー・アソシエーションの一つであるといえる（佐藤1982）。

子育てサークルは，1970年代に地域環境の変化に危機感を感じ始めた母親たちが，子どもたちを自然の中で遊ばせたい，体験させたいとの思いで子育て運動としてはじめた子育てグループに端を発するが，その後，様々な契機で多くの子育てグループが形成されていった。特にエンゼルプラン[1]施行後は，子育て支援の一環として「子育てサークル」[2]が注目され，全国各地

* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程（教育臨床講座）

で多くのサークルが形成されていった。

それに伴って子育てサークルに関する研究も盛んになりつつある。一口に子育てサークルといっても，その活動の目的や形態，成員の構成，結成の契機にはさまざまなタイプがある。そのため研究の初期段階では子育てサークルの活動について事例を用いながら考察したもの（増山 1992，原田 1993）や，類型化したもの（山本 1997，木脇 1998，小木 2000）が多い。その後，サークルと育児不安との関連に着目した研究（住田・溝田 2000）を始めとし，子育てサークルを地域集団として捉えた研究（渡辺 2000）や，母親同士のネットワークを検討したもの（松田 2001）がある。また近年では子育て支援の視点から，成員のサークルへの関りに注目して母親の意識を分析したもの（結城 2001）や，サークルの運営上の問題点について検討したもの（原田 2002），さらには，生涯学習や男女共同参画と絡ませてサークルを見つめる視点などが生まれてきている（中野 2002，矢澤・国広・天童 2003）。

そのような中，サークルに対していくつかの共通した問題が浮上してきた。そのひとつが，サークルの継続性についての問題である。子育てサークルには，同じメンバーで長い年月活動を続けているサークルもあれば，子どもの成長とともに，サークルをいわば卒業する形でメンバーが入れ替わりながら活動を続けているサークル，子どもの成長とともに活動を終了してしまうサークルがある。特に近年目立つのは，子どもの成長とともに活動を終了する，すなわち解散するサークルであり（小木 2000），それに関する議論も進んでいる。

サークルの解散に関する要因には大きく 3 つの捉え方がある。まず第 1 に，サークル運営に関する問題である。原田は，関西地区にある 800 あまりの子育てサークルの調査から，対人関係が苦手な現代の母親たちが参加する「子育てサークル」は，何も規則がない故に，うまく機能することが難しい実情であることを述べている（原田 2002）。また小木も，子育てサークルづくりや運営における問題として，上からの押し付け，活動の硬直化，世話役のなり手がいないことをその要因としており（小木 2000），サークルが集団として機能する上で脆弱な部分があることを指摘している。

第 2 に，人間関係が根本的な原因だとする捉え方である。藤本は，京都市内で活動する子育てサークルの調査において，1997 年までにおよそ 10 サークル，以後 6 年間で 13 サークルが解散または自然消滅していることにふれ，その理由として後継者がいないというリーダーに起因する問題や，活動内容などの意見が合わないこと，さらに人間関係がもつれて内部対立してしまうことをあげている（藤本 2003）。

また汐見も子育てサークルをテーマとしたシンポジウムにおける発言で，子育てサークルは継続すること自体が難しく，その理由として子どもの成長によって中心メンバーがいなくなることや，内部のちょっとしたいさかいがきっかけであることを述べている（汐見 2001）。これらに共通するのは母親同士の人間関係に起因した緒問題が解散につながっているとした見方である。

第 3 に，成員のサークルへの関り方が，サークルの評価に影響しているとの見方である[3]。結城は，サークル活動は他のメンバーとの共同作業で成り立っていることに着目した。サークルに関る成員の意識には，自らが積極的に活動に参与して行こうという意識（「共同性志向」）と，サークル内の雰囲気を重視しながら，自らの行動を全体の歩調に合わせようとする意識（「関係性志向」）があり，成員はその意識に影響されサークル活動に関っていると述べた。そしてサークル活動への負担や不満は，関係性志向が高いメンバーが多くなることによって強まることを

指摘した。つまり，メンバーへの「気遣い」やサークルでの関係が同調的な行動を求めるものであった場合には，サークルに不満を感じ，やめたいと希望する可能性が高いことを示唆したのである（結城 2001）。

このようにサークルの解散に関する議論には複数の見方が存在する。しかし，一方でこれらの異なる議論には共通した特徴もみられるのである。

その一つは解散の要因を単一の問題として捉えており，他の要因との関連性について深い検討がなされていない点である。だが運営の問題や人間関係，成員のサークルへの関り方などには関連があるだろう。とすれば解散のメカニズムを探るのは，それらを複合的にみていく必要が生じてくる。そのためには調査の方法も考えなければならない。多くの先行研究は，ある一時点での調査結果を分析の対象としている。しかしサークルがある一定期間の活動を経て解散に至っていることを考えれば，一時点の調査だけでは限られた部分しか見えない可能性がある。

今ひとつの特徴として考えられるのが，サークルの解散がネガティブな現象として捉えられていることである。それは先の 3 つの議論が，子育てネットワークなどのいわば子育て運動や，子育て支援といった立場から，サークルを活性化するためにはどうすべきかという目的に基づいて検討されているからである。しかしそれは，いわばサークル側からみた解散であり，成員が解散をどのように捉えているかという成員側からみた解散についての研究はみられない。こうして見ると子育てサークルの解散についての議論は始まったばかりであり，多くの点で検討の余地があるといえよう。

1．課題の設定と分析の視角

既にみたように，子育てサークルの解散にはいくつかの問題が絡んでいると予測される。しかしそれらの要素が実際にどのように作用してサークルの解散に至るのだろうか。また，サークルの解散は成員にとって，やはりネガティブなこととして捉えられているのだろうか。そこで本稿では次のように 2 つの課題を設定したい。

1 つ目は，サークルの解散にはいかなる要因が影響し，それはどのように関連しあっているのかということである。今ひとつの課題は，サークルの解散は成員にとってどのような意味を持っていたのかを検討する事である。

本稿ではこれらの課題をあきらかにするために，先にみた解散要因における 3 つの捉え方を踏まえながら，不足する視点を加え検討していこう。

まず，はじめの視点はサークルの運営についてであった。サークルの運営がうまく機能しないことが解散に結びつくという要因を検討するためには，まず成員がサークル活動を目的に合った活動であると評価しているか否かを確認する必要があろう。サークルがこれまでどのような活動を行ってきて，成員はそれをどのように受けとめていたかを，あきらかにする。さらに，子育てサークルの参加単位が母親個人ではなく，母親と子どもという母子単位であり[4]，活動内容は子どもの年齢に規定される側面を持つ[5]ことにも配慮しよう。

次の視点は母親同士の人間関係であった。これは母親同士がサークル内でどのような関係を構築していたのかをみる必要がある。その際は，ある活動における一場面ではなく，先にみたような運営の場面や単なる参加者としての場面に加え，サークル活動以外はどのような関係であったのかを確認する。

最後の視点は，母親のサークルへの関り方がサークルの評価に影響しているという見方であった。それをあきらかにするためには，企画や運営におけるメンバーの意識や，サークルの人間関係を見ていく中で検討しよう。

また，これら3つの視点すべてについて，活動の経緯という時間的な変化も踏まえてあきらかにする。サークルの生成，展開過程それぞれにおける意識や社会関係の総体をみることでより詳細な分析が可能となるからである。

2つ目の課題であるサークルの解散がどのような性質のものであったのかを検討するためには，先の視点に加えサークル解散後の成員の生活や意識をみていく必要があろう。なぜなら，解散した後の生活や意識をみることで，マイナスに捉えられていた解散も，成員から見れば異なる意味を持つことが考えられるからである。

以上のことを踏まえながら，分析は次のように進める。はじめにサークル加入の目的とサークルとしての活動の目的を確認する。その上でサークル生成から解散に至るまでの母子それぞれの活動を，時系列に沿って確認し，参加者の活動に対する捉え方をみる事でサークルが目的に添って機能していたかについてあきらかにする。その際は，活動や運営，さらにサークルの評価に影響を与える要因に注意を払いながらみていこう。最後に解散後の彼らの生活と意識をあきらかにしていくことで成員にとってのサークルの意味を検討する。

2．当該地域の子育てサークルの状況

調査の結果に入る前に，本調査の対象地域である札幌市の子育て支援施策，なかでも子育てサークルに関連するものを確認しよう。

当時札幌市において子育てサークルの育成・支援に直接関連している機関には「保健センター」と「子育て支援担当課」があった。保健センターでは1988年より，母親教室に参加した者を対象に，親同士の交流を目的としてサークルづくりの支援を行っていた。例えば他の区と比較しても活発な事業を展開していたN保健センターでは，「赤ちゃんといっしょ」という名称で3ヶ月～5ヶ月の第一子を持つ母親を対象にした教室を開催していた。講習は2度に分けて行われ，その内容は，保健師の講話の他，居住地ごとに輪になって母親同士の交流が行われる。講習の終了時には保健師から子育てサークル形成についての誘いがある。N保健センターの実績を見てみよう。例えば1999年に行われた講習に2度とも参加した者は200名近く，その中からは11ほどのサークルが誕生し，この3年間に形成されたサークルは30を超える[6]（表1）。

また，子育て支援担当課では，国の少子化対策であるエンゼルプランを受けて，まさに子育てサークルを作ることを目的とした「遊びのひろば」という事業を各区ごとに展開していた。

表1　サークル形成の実績

年　度	1回目参加数	2回目参加数	両回参加数	サークル結成数
1997年度	317組	225組	203組	10サークル
1998年度	337組	225組	203組	10サークル
1999年度	378組	226組	196組	11サークル
2000年度	209組	148組	137組	なし

※2000年度N保健センター資料による

これは，3歳～5歳までの就学前の子どもと親を対象として，指導員[7]が親子遊びの場を提供するものである。「遊びのひろば」は，1グループ20組程度で，週に1度地域の児童会館を利用し1時間半程度行われる。親子遊びは8週で終了するが，最終回にはこれまで参加した者に対してサークル形成の誘いがある。ほとんどの参加者はそれに応えサークルを結成していった。つまり，8週で1つのサークルが複数作られることになる。現在それは子育てサロン[8]という，事前の申し込みが必要なく，親子が自由に参加できる形態の事業に転換したため[9]，子育てサークルが大量に形成されることはなくなった。だが，サロン利用者のニーズに対応する形で，希望者に既存のサークルを紹介したり，要望があればサークルを作る為のアドバイスなどは行っている。他にもサークルからの要望があればその場に出向き，遊びの指導を行うこともあるが，それはあくまでも単発的なものである。札幌市では他にもサークル運営に役立つ情報を発信したり，サークル交流会やサークルリーダーに対する交流会を実施している。さらに区によってはサークル活動ができるような場所を無料で提供するなどの支援をしている（表2）。

そのため市内で活動するサークルの総数は比較的多い[10]。サークルの登録数は，1999年度の722サークルをピークに，2002年度の末にも419のサークルが活動の登録をしている。この中には，先にみた保健センターや子育て支援の事業を通じて形成されたサークルばかりではなく，地域で自主的に形成されたサークルや，母親たちの子育て運動として形成されたサークル等，多様な契機で形成されたサークルも含まれている。

しかしサークルの継続年数をみると，長年活動している例はそう多くない。ほとんどのサークルは，誕生しても数年で解散しているという現状である。現に後述する2000年12月に行った調査では592のサークルがあったが，2002年度末に調べてみると，419サークルであった。さらにこの中で当時のサークルは151サークルだけであり，4分の1程度（25.2%）しか存続していない[11]。このことからも，多くのサークルが数年の活動を経て解散していることがわかる。

3．対象サークルと調査の概要

本研究では今回の調査に先駆け2000年12月に札幌市内で活動するすべてのサークルに対して，サークルの実態を明らかにすることを目的とした質問紙調査を実施している。その際，サー

表2　子育て支援事業実績（数字は延べ数）

事業名		1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
子育てサロン	会場数	80館	92館	93館	98館	100館	99館
	参加組数	38,957	55,479	78,726	114,881	123,955	135,011
	登録組数	—	7,674	13,884	12,945	13,653	13,958
サークル支援数		270件	808件	755件	485件	264件	239件
サークル登録数		146組	511組	722組	566組	524組	419組
リーダー研修会		—	4回201	3回173	3回138	2回61	—
サークル研修会		—	—	—	—	14回218	12回188
リーダー交流会		—	18回203	93回802	95回652	85回453	55回299

※札幌市保健福祉局児童家庭部資料による。数値は，年度月末のもの。
ただし，'98・'99年度の子育てサロン登録組数は，12月31日現在の組数。

クルがどのような活動を行っているのかを，母親と子どもそれぞれに注目しながら考察した。その結果，子どもに対する活動は，毎回遊びを設定しているかいないかの違いだけであったが，親のための活動内容は，「まったく取り入れていない」，「学習的な活動のみ取り入れている」，「娯楽的な活動のみ取り入れている」，「学習的な活動，娯楽的な活動の両方を取り入れている」という4つのタイプに分類された。それら4タイプについて分析を進めたところ，子育てサークルは母親の活動内容によって異なる特徴を持つことがわかった。中でも学習と娯楽の両方を取り入れているグループは，もっとも活動的であり，活動の目的すべてが高い比率で支持されており，成員自らが掲げる目的を実際に実現している積極的なタイプと見ることができた。

本調査の対象となったのは，そのような積極的なタイプに属する，市内Y区の「Z」サークルとその成員である。Zサークルは Y保健センターの母親教室を契機に2000年2月に結成されている。そのため，出産前から顔見知りであるメンバーも多い[12]。サークルの規模をみると，結成当時は，大人23名，子ども23名でスタートしている。だが，家族の転勤や，メンバー自身の仕事復帰などを理由に，成員数は減少しており，解散当時の大人のメンバーは16名ほどであった。反面子どものメンバーは第二子の誕生があり27名と増加している。サークルの活動は月に一度，地域の公共施設や公園などを利用して行ってきた。

本サークルへの調査は，2000年12月に札幌市全域で活動する子育てサークルを対象とした質問紙調査（調査①）をかわきりに，2001年7月にはリーダー含めた成員4名に対する面接調査（調査②）や，サークル活動の観察などを行った。その後，2002年9月～10月には16名の成員中，14名に対する面接調査（調査③）を，2003年6月から翌年3月までは解散後の元サークル成員10名に対しての面接調査（調査④）など，継続した調査を行ってきた。本稿ではこれまで行った調査の中でも主要な2つのデータを中心に分析をすすめる。その1つは，サークルが結成されてから2年半後に行った面接調査（調査③）であり，もう1つは，サークルが解散して半年を経過した時点で行った面接調査（調査④）である（表3）。

インタビューは対象者の自宅，公共施設，託児ルーム付の飲食店等でおこなった。時間は，1度のインタビューにつき概ね1時間～2時間程度である。

4．サークルメンバーの属性と加入の動機

4－1　メンバーの属性

Zサークルはどのようなメンバーで構成されていたのだろうか。メンバーの属性をみてみよう。2002年の調査当時，対象者の年齢は，26歳～37歳で平均31.8歳。メンバーの配偶者である夫の年齢は30歳から44歳で平均33.3歳であった。子どもの年齢は，長子はすべて3歳，また，サークル加入以降に誕生した第二子が8名いる。男女別では第一子が女児5名，男児9名，第二子は男女とも4名ずつであった。家族形態は核家族が10名，3名が夫方の祖父母と同居，

表3　Zサークルへの調査

調査①	質問紙調査	2000年12月～翌年1月	札幌市内で活動する592の子育てサークル
調査②	面接調査	2001年7月～10月	リーダーを含む4名の成員
調査③	面接調査	2002年9月～10月	調査の協力を得られた14名の成員
調査④	面接調査	2003年6月～翌年3月	調査の協力を得られた10名の成員

表4　属性1

	妻年齢	夫年齢	子ども性別・年齢		他の同居家族	居住地域	居住年数
A	37	44	3・男	2・女		Y区O	5年
B	30	38	3・女	0・女		Y区P	6年
C	31	33	3・男			Y区Q	4年
D	33	33	3・男			Y区O	2.6年
E	30	36	3・男	1・男		Y区R	1.3年
F	32	32	3・男			Y区S	3年
G	31	33	3・男	0・男		Y区R	4年
H	34	36	3・女		夫方祖父母	Y区R	3年
I	34	35	3・女		夫方祖父母	Y区Q	7年
J	30	39	3・女	0・女		Y区T	3年
K	33	33	3・男			Y区Q	3年
L	35	39	3・女	1・女	夫方祖父母	Y区O	5年
M	26	35	3・男	1・男		Y区R	5年
N	30	30	3・男	1・男	妻方祖母	Y区U	4年

1名が妻方の祖父母と同居であった。(表4)

メンバーの職業は1名だけが専門・技術的職業(ピアノ講師)に従事しているが，ほかは無職，すなわち主婦専業である。夫の職業は，すべて雇用者としての就業である。その分類は，事務従事者が6名，専門・技術的職業従事者が4名，販売従事者が3名，保安が1名となっており，雇用形態は全て正社員としての雇用である(表5)。世帯の年収は，200万～400万未満が2名，400万～600万未満が5名，600万～800万未満が7名となっている。

対象者の学歴を見ると，高校が3名，専門学校が5名，短大が3名，大学が3名であった。卒業後についた初職時の年齢は18歳から22歳である。当時の職業を聞いたところ，事務従事

表5　属性2

	妻職種	夫職業	出勤日数	夫出勤・帰宅時間	
A	無職	事務従事者	5日	7：30	19：00
B	無職	事務従事者	5.5日	8：30	21：00
C	無職	事務従事者	5日	8：00	22：00
D	無職	販売従事者	6日	8：00	23：00
E	無職	専門・技術	6.5日	6：30	19：30
F	無職	販売従事者	6.5日	9：00	20：30
G	無職	専門・技術	5.5日	8：30	23：00
H	無職	事務従事者	5.5日	7：00	20：30
I	無職	専門・技術	6日	9：30	0：00
J	無職	販売従事者	5日	週末のみ帰宅	
K	無職	事務従事者	5日	7：50	23：00
L	専門・技術	専門・技術	6日	6：30	21：00
M	無職	保安職業	5日	8：40	17：20
N	無職	事務従事者	5日	7：45	21：00

※出勤日数は週あたりの日数

表6　属性3

	妻学歴	夫学歴	妻初職	年齢	ライフプラン	妻転職経験	退職時期	継続願望
A	短期大学	大学	事務従事者	20	結婚・退職	あり	結婚時	なし
B	専門学校	専門学校	専門・技術	20	特に考えなし	あり	結婚前	なし
C	短期大学	大学	専門・技術	20	結婚・退職	あり	結婚後	迷った
D	高等学校	大学	事務従事者	18	結婚・退職	あり	結婚前	なし
E	短期大学	高等学校	サービス	20	結婚・退職	なし	結婚時	なし
F	専門学校	大学	事務従事者	20	妊娠・退職	なし	結婚前	なし
G	大学	大学	専門・技術	22	妊娠・退職	なし	結婚時	なし
H	専門学校	中学校	事務従事者	20	結婚・退職	なし	妊娠時	なし
I	専門学校	高専	販売従事者	19	結婚・退職	なし	妊娠時	なし
J	高等学校	大学	事務従事者	18	特に考えなし	あり	妊娠時	あり
K	大学	大学	事務従事者	24	一生続けたい	あり	妊娠時	なし
L	大学	大学	専門・技術	22	妊娠・退職	なし	結婚後	あり
M	専門学校	高等学校	専門・技術	20	結婚・退職	あり	結婚前	なし
N	高等学校	高等学校	事務従事者	18	特に考えなし	なし	妊娠時	あり

※ライフプランは初職時，継続願望は退職時のものである。

者が7名，専門・技術的職業従事者が5名，販売従事者とサービスが各1名であった（表6）。勤務先の所在地は11名が札幌市内，札幌市外が2名，道外が1名と，結婚前よりこの地で生活している者が多い。初職時のライフプランを見ると，仕事を「一生続けようと思った」と答えた者は1名のみでほとんどが「結婚したら辞めようと思っていた」（7名）「子どもが出来たら辞めようと思っていた」（3名）であり，結婚前より専業主婦志向を持っていたといえる。事実，退職の時期をみると，結婚前が4名，結婚時が3名，結婚後が2名，妊娠時が5名であった。退職の際に，出来れば仕事を続けたいという継続願望を持っていたものは3名だけで，残りの11名に明確な継続願望はなかった（表6）。こうして彼らの学歴，世帯年収，就業から結婚に至る経緯などをみると，どちらかと言えば平均的な階層の専業主婦であるとみることが出来る。

4－2　サークルの活動目的と加入の動機

彼らは，どのような意図を持ってサークルに加入したのだろうか。サークルの活動はメンバー自身が活動を企画し運営していくことが多く[13]，Zサークルもそのような運営スタイルであった。その場合，重視されるのはサークルの活動目的と個々のメンバーの意識であろう。

サークルとしての活動目的をアンケートの結果からみると，「子どもの仲間づくり」「子育ての情報交換」「親子で出かける場」「子育ての息抜き」「親の仲間づくり」「子育てについての学びの場」「子育てに限らない学びの場」「育児不安や悩みの解消」を重視している。このことから，サークル活動は，子どものためであると同時に，親自身も，友だちをつくりたい，息抜きや学習の場としたいなど複数の目的を持っているといえる。

一方，成員個々の加入の動機をみてみると，「知識や情報がほしい」「子どもの友だちがほしい」というものが各10名ともっとも支持されている。次いで「母親の友人がほしい」が8名，「子どもを遊ばせたい」が6名，「悩みを解消したい」が4名と，子ども同士の友だちを求めているだけでなく，初めての子育てで不安なために，子育ての情報や自分自身の友達を求めてサークルに加入したことがわかる（表7）。

表7　サークル加入の目的

	加入時期	サークル加入の目的					
		母親友人	悩み解消	知識・情報	子・友人	子・遊び	その他
A	結成時						母親同士のつながり
B	結成時	○	○	○	○	○	
C	結成時	○			○		
D	結成時	○	○	○	○	○	
E	結成時			○	○		
F	結成時	○			○		
G	結成時			○	○		
H	結成時	○		○	○	○	
I	中途加入	○			○	○	
J	結成時		○	○			
K	結成時	○		○	○	○	
L	結成時		○	○	○	○	
M	中途加入	○		○			他の子と比較したい
N	結成時			○			

それは「近所には子どもはいない」「同じように子どものいるママ友達が欲しかった」という理由による。札幌という都市社会のなかで，家庭に篭っていては，他の人と話をする機会もないことがサークル加入の動機に反映されているといえる。このような加入動機を持つ彼らは，実際にどのような企画を立て活動していったのだろうか。

5．サークル活動の軌跡

Zサークルの場合，活動内容の企画・運営は，当初リーダーが中心であったが，成員間の話し合で，「お世話役」という当番制を採用した。お世話役は3人1組で行われ，3ヶ月で次に引き継がれる。つまり，3人1組で3回ほどの企画・運営を担当するのである。

では実際にこれまで行った主な活動を見ていこう。サークルの活動を見ていくのは，彼らの目的や要望がどの程度活動に反映されていたのかを確認するためであるが，同時にその過程に解散の要因が隠れていないかを見ていくことでもある。

またその際には，「成長過程の子ども」をメンバーに含むという子育てサークルの特質に留意しよう。母親だけの活動とは異なり，子育てサークルのほとんどの活動は子どもが一緒である。活動によっては，子どもにとって難しい，あるいは無理な活動もある。つまり子育てサークルは，子どもの年齢によって活動が規定される側面を持つのである。そこで，ここでは結成時から解散までの活動内容を，子どもの年齢に合わせて1年ごとに大きく4つの時期に分類しみていく（表8）。

①　誕生～1歳前後〈サークル初期〉

まず結成時から子どもが1歳前後の時期である。この頃までの子どもは，歩いて移動することや，集団での共同遊びのようなことは出来ない。母親はかつて一人身だった時と比べ，子ど

表8　サークルの活動内容

	子ども年齢	活動内容
2000・2 2000・秋頃	〈前期〉 1歳前後	プロフィールブックつくり，保育士の手あそび，歯科衛生士の歯の手入れ，応急処置，ママだけの飲み会，パパも参加のバーベキュー，離乳食の相談，1歳おめでとうカード
↓ 2001・秋頃	↓ 〈中期〉 2歳前後	幼児食のすすめかた，トイレットレーニング，クリスマス会，ひな祭り，TV「ゴーゴーママ！」スタジオ体験，公園遊び，動物園，ママの飲み会，ハロウィンパーティ（仮装），冬の生活と雪遊び
↓ 2002・秋頃	↓ 〈後期〉 3歳前後	水遊び，2歳児のしつけ，絵本とおもちゃの付き合いかた，チャイルドカットのコツ，メイク・ネイル・フットケア安らぎ体験，雪中運動会と遊びの屋台，キッズリトミックとママストレッチ，切り絵と沖縄じゃみせん，電車でお出かけ消防署見学，子ども写真のとり方，水遊び，公園遊び
↓ 2003・3月	↓ 〈解散期〉	自由あそび，紙芝居，お別れ会

もを連れての外出が何かと手がかかることを実感する。そのため特に専業の母親は日中家の中で子どもと二人きりになることが多く，子育てに関する不安もつのる。この時期は，子育て期のなかでも社会との接点が少ない，最も孤独な時期であるといえる。それゆえ母親は子どものことを話せる相談相手が欲しいと考えており，そのことがサークル参加の契機となっていた。

そのためサークルの活動もそれを反映したものになっている。リーダーに対するインタビューによれば，サークル結成当初は「話を出来る場プラス子どもの成長や不安なことを確認できる場」を心がけたという。そのため時々プロ[14]に意見を聞けることを意識したようだ。

活動内容は，「保育士の手遊び」「離乳食の相談会」「歯科衛生士の歯の手入れ」「応急処置」など初めての子育てで知りたいこと，知っていると便利なことを子どもの発達に合わせて企画していることがわかる。

また，母親同士が親しくなれることに配慮した活動も行っている。例えば，「メンバーのプロフィールブックづくり」「ママだけの飲み会」や「パパも参加のバーベキューパーティ」などである。メンバーのプロフィールブックは，それぞれの親子の写真や出身地などプライベートな内容を盛り込んだ。また，ママだけの飲み会は，子どもが離乳する時期に子どもを置いて出かけられるよう夜に設定している。

しかし一方で子どもに対する企画としては「保育士の手遊び」と「1歳おめでとうカード」を作成しただけである。これらのことから，子どもが1歳をすぎるまでのサークルは，母親の活動が中心であったといえよう。

②　1歳前後～2歳前後〈サークル中期〉

1歳を過ぎてからの子どもは，歩行も可能になり周囲のものに対する興味も旺盛になってくる。まだ言語を使っての意志疎通は出来ないが，興味の対象によっては泣いたり歓んだりする様子が見て取れ，親にとっては子どもの喜びそうな遊びを経験させたいと思う頃でもある。

Zサークルの1歳を過ぎてからの活動は，それまで多かった「幼児食の進め方」「トイレットレーニング」という母親の学習的な活動は多少減少し，子どもと親が一緒に楽しめるような「ハローウィンパーティ」「クリスマス会」「ひな祭り」など季節の行事を取り入れている。生後1

年を無事に過ごせたことで子育てにも少し余裕が出来，新生児期のように，どうしていいかわからず戸惑うことは少なくなる。そのことが学習的な活動が減少したことにつながっている。

それに代わって多くなったのが，子どものための企画である。この時期は「クリスマス」や「ひなまつり」など季節の行事的な活動以外にも，「冬の生活と雪遊び」「公園遊び」「動物園」等，親子で一緒に遊べる企画を用意するなど，初期の頃と比較すると，親子が共に楽しめる活動が多くなっていく。さらにこれまでと同様に母親同士の交流を目的とした「ママの飲み会」や「テレビ局のスタジオ体験」なども行われるなど，サークルとしての活動に広がりがみられる頃である。

③　2歳前後～3歳前後〈サークル後期〉

2歳を迎える頃の子どもは，さらに活動的になってくる。言葉も覚え始め自分の意志も少しずつ伝えられるようになり，同年齢の子どもとも遊べるようになってくる[15]。

この時期の活動内容をみると，子どもの発達に関する学習的なものは「2歳児のしつけについて」「絵本とおもちゃの付き合い方」のみであり，子ども向けの企画が多くなっていく。「水遊び」「公園遊び」「雪中運動会と遊びの屋台」「切り絵と沖縄じゃみせん」「電車でおでかけ消防署見学」などである。また，母親向けとして「チャイルドカットのコツ」「メイク・ネイル・フットケア安らぎ体験」「子どもの写真のとり方」などイベント的な活動を取り入れていた。それはサークルの参加者が減少しはじめたことと関連がある。

この時期サークルでは第二子を出産するメンバーが現れてくる。メンバーが言うところの2人目ラッシュである。2人目を出産するメンバーは出産前後数ヶ月お休みとなるため，参加者に多少ばらつきがみられるようになってくる。さらに母親同士の付き合いもある程度深まる事で人間関係が固定化し始める。そのため参加者も決まった顔ぶれになりつつあった。

またこの時期は，子どもの成長に伴ってサークル以外にもさまざまな体験をさせたいと考えるようになる。メンバーの子どもの中にも，プールやリトミックなどの習い事をはじめる者が出てくる。そのようなメンバーの意識が形となって表れたのが2002年4月に立ち上げた英語サークルである。これは，サークルの一部のメンバーが中心となって，子どもと母親が一緒に英語を楽しみながら学習することを目的にしたサークルである。ネイティブの講師に依頼し週に1度，地域の公共会館を利用して活動している。英語サークルは経済的にもZサークルとは別の運営で行っているが，半数程度のメンバーはそちらにも参加していた。

④　3歳以降〈サークル終期〉

3歳を迎える子どもは心身ともに目覚しい発達を示す時期である。基本的な運動能力が備わり自分でできることが拡大する。相手に自分の意志を伝えられるようになり，友達との関りを求めるようになってくるなど，これまで以上に成長の著しい時期である。しかし，この時期のサークルはそれまでの活発な活動と比較すると，どちらかといえば地味な活動になっていく。「公園遊び」「保健センターでの自由遊び」「紙芝居」などである。そして2003年を迎え，メンバー全員にサークルの解散・継続についてアンケートをとり，その結果サークルは3月の「お別れ会」を最後に解散に至るのである。

このように結成から解散までの活動をみると，実に多彩な活動が企画され行われてきたこと

がわかる。では成員はそれらの活動をどのように捉えていたのだろうか。

6．活動に対するメンバーの意識

サークルの活動内容には，すでにみたように子ども向けのものと母親を意識した活動という2つがあった。そこでこの2つの活動に対するメンバーの意識をみていこう。

6－1　子ども向けの活動に対する意識

まず，これまでの活動のなかで子ども向けの活動を振り返ってみよう。サークルがスタートした当初は，子どもが乳児であったという理由で，特に子ども向けの活動はなかった。しかし子どもの成長に伴って，次第に子ども向けの季節の行事などが行われるようになる。それについて，「子どもが喜んでいるのを見るとよかったと思う」という親としての素直な感想が多い。中期以降は，子どもの動きが活発になるので，自由に遊ぶだけでも楽しく，公園での水遊びなどは評価が高い。サークルの後期に入ると，子ども向けの活動はさらに充実してくる。しかし3歳を迎えるこの頃は，乳児期と異なりサークル以外にも遊べる機会があると考えられる。だがそのことを尋ねてみると，半数以上の子どもが週2～3以上の機会を持つものの，その対象は「習い事のお友だち」や「サークルのお友だち」など，意識的に機会を作らなければならない相手であり，「近所の子ども」と答えたものは4名だけった。「近所には高齢者しかいない」(Nさん)という話に表れるように，なかなか子ども同士が付き合う機会はないという現実がある。

そのような背景を持つためか，母親はサークルに参加することで生じる子どもの変化を好意的に捉えている。0歳の時からサークルに参加しているため，子どもの変化はごく自然なものと感じているようだが，家に帰ってから，「○○ちゃんと遊んだね」「○○ちゃんいたね！」(Hさん)と子どもの言葉を聞いて嬉しく思っているほか，「活発になったし，名前を言って会いたいという」(Mさん)などの子どもの変化を望ましい子どもの成長と捉えており，サークルが子どもにとってよい影響を与えていたと評価している(表9)。しかしながら，子どもが成長し出来ることも多くなるのに従って，母親たちは子どもにもっと多くの経験をさせたいと考えるようになる。そのことが，英語サークルであり，個別に行っている習い事である。そのため公園での自由遊びは楽しい時間であるが，サークルでなくとも「いつでもできる」という側面を持っているので「水遊び」や「電車…」などの活動と比較すると欠席者もみられ，高い評価にはつながらない結果となっている（表10)。

6－2　親向けの活動に関する意識

一方親のための活動に対する意識は，子どものものとは多少異なっている。先にみた活動の時期でいえば，特に初期のものの評判がよい。子育てに関する学習会では，共通して抱いている悩みについて専門家の視点からアドバイスしてもらえることがよかったと言う。子育ての知識を得ることが出来たという者も多い。そのことをとおして「悩みが少なくなった」という。特に初めての子育てで，知識や技術が不足しているために生じる問題については，「皆おなじなんだな」「ああそうか…」と思えるようになり，気が楽になったという話が多く聞かれた。

またこの頃に行った母親の交流を深めるいくつかの活動についても評判がよい。そのことで，

表9　子どもの変化

	変化したこと	子どもの様子
A	積極的・協調性	
B	わからない	はじめから参加しているので，それが当然と思っている
C	積極的・協調性	父親に話したりする。家では乱暴だが，外では自分を出さないようだ。
D	変化なし	サークルに行ったら楽しんでいるが，前後は特にない。
E	積極的	最初はお友達の中に入っていけなかったが。
F	積極的・協調性	
G	わからない	小さい頃から参加しているので，それ以前と比較できない
H	わからない	入っていけるようになった。「○○ちゃんいたね」という。
I	協調性・わがまま・その他	他の子におもちゃを貸したり，譲ることを覚えた。あいさつしたり，他の子のしぐさを覚えて真似するように。他のママの言うことも聞く。
J	積極的・協調性	波があるけど，仲良く遊べるようになって，ある意味では協調性がついたということか。
K	協調性	私が打ち合わせしている時でも「ママー」ってなったりしない。
L	積極的・協調性	靴を出す，そろえる，あいさつ，喧嘩，とった，取られた。サークルに行ってできるようになった。
M	積極性	小さい頃から見たら活発に動くようになった。名前を言って会いたいと言うように。
N	協調性	仲良くなった。日々成長している。

「母親自身の友人ができた」ことをほとんどの者が高く評価している。初めての出産や子育てには不安や悩みが生じることが多い。彼らはそれを共有できる同質（同じように乳幼児を育てている）の友人を求めている。古くからの友人がいたとしても，その友人が同じ時期に子どもを持つ可能性は低い。また，近隣の付き合いが少ないなかで，友人に出会える機会も少ない。そのような孤独な状況に置かれていた彼らが，サークルに参加し活動することによって，交流が深まり個人的なことも話せるようになる。そして，話をすることで日常のストレスを解消しているようだ。母親が親しくなれるような企画は，サークル活動に楽しく参加できるきっかけとなっていた。

だが，サークルでの活動が長くなるとともに，特に母親の交友関係に配慮するような活動は用意されなくなっていく。そのことは，あえて用意しなくともそれぞれに親しい関係が出来ているためという理由がある。それにかわって企画されていたのが，「メイク…」や「子どもの写真…」などのイベント的な活動といえよう。これらに対する評価は総じて高い。特に「メイク…」は，18名もの参加があったようだ。美容師を目指す専門学校の生徒にお化粧やネイルアートなどをしてもらうことで，日常の生活では得られない安らぎを得られたという。「楽しかった。」「あれは出たかったのだけど，出られなくて残念だった」などの声が多く聞かれ，母親のイベント的な活動に対する評価が高いことが確認された（表10）。

6－3　親と子どもの欲求の推移

すでに見たように，結成時から解散するまでのサークルの活動と成員の意識は，時間的な経過とともに異なるものとなっていった。そこでこれまでの活動を，「子どものため」を縦に「親

表 10　活動の評価

	公園・自由	講習会	イベント母	クリスマス	水遊び	バーベキュー	イベント子	その他・特によかった活動
A	不参加	ほぼ満	満足	ほぼ満	ほぼ満	不参加	ほぼ満	第2子出産のため，途中中抜けしている。
B	満足	ほぼ満	満足	ほぼ満	満足	不参加	ほぼ満	
C	満足	わからない	満足	わからない	ほぼ満	わからない	ほぼ満	絵本の読み聞かせ。音楽にあわせ専門家をよんで，サークル以外からも参加してもらった。自分で運営した大変さがあった。
D	ほぼ満	ほぼ満	ほぼ満	ほぼ満	ほぼ満	不参加	ほぼ満	
E	満足	ほぼ満	満足	ほぼ満	不参加	ほぼ満	ほぼ満	電車に乗って，消防署。自分も楽しかった。
F	満足	満足	不参加	ほぼ満	満足	不参加	満足	
G	満足	ほぼ満	ほぼ満	ほぼ満	満足	不参加	ほぼ満	電車。ただし子どもは怖がった。
H	ほぼ満	満足	不参加	不参加	満足	不参加	満足	プール。水遊びしたときかなぁ。
I	満足	満足	満足	ほぼ満	満足	満足	満足	
J	ほぼ満	わからない	不参加	満足	満足	不参加	満足	写真。記念に残ってよかった。
K	ほぼ満	ほぼ満	満足	ほぼ満	ほぼ満	満足	満足	メイクと，パフォーマー。
L	不参加	ほぼ満	不参加	不参加	不参加	不参加	ほぼ満	電車がすごくよかった。ただ，もう少し大きくなってからも行かせたいと思う。
M	不参加	ほぼ満	ほぼ満	ほぼ満	満足	満足	満足	
N	ほぼ満	やや不	満足	ほぼ満	ほぼ満	不参加	ほぼ満	電車は大変だった。

表 11　活動欲求の変化

母親 ＼ 子ども	強	弱
強	第1象限 〈サークル中期〉 母親ともに活動欲求が強い。	第3象限 〈サークル後期〉 子どものための欲求は強いが，母親の欲求は弱い。
弱	第2象限 〈サークル初期〉 母親の欲求は強いが子どものための欲求は弱い。	第4象限 〈サークル解散期〉 母子ともに活動欲求は弱い。

のため」を横に設定して整理した。すると，表11のようにそれぞれの欲求の強さを表す4つの象限ができる。第1象限は子ども母親ともに強く，第2象限は子どもは弱く母親は強い。第3象限は子どもは強く母親は弱い。第4象限は子どもも母親も弱くなる。これをこれまでの活動に当てはめれば次のようになる。サークル初期は子どもが乳児期のため，出来ることが限られ子どものために何かしたいという欲求は弱い。それに反して母親は初めての子育てで不安なこと，メンバーと知り合えた嬉しさもあり，活動への欲求が強くなる(第2象限)。これがサークル中期になると，子どもの成長に伴って出来ることが増すため，親子ともに楽しみたいという両方の欲求が高くなる(第1象限)。ところがサークル後期になると，子どもに対しては楽しめる活動をしたいと思うものの，母親は子育てにも慣れインフォーマルな関係が促進されるため

欲求は弱くなる(第3象限)。さらにサークル解散期は，子どもにはさらに多様な経験をさせたいと望むことで，サークル以外に活動の場を求めるようになる。また母親もサークルでの関係が固定化することで，ともに欲求が弱くなる（第4象限)。

7．活動に関連するその他の要因

これまでサークル活動の2つの目的である子どもと親という視点から，サークルの活動とそれに対するメンバーの意識を見てきた。しかし解散に至る要因を探るためには，参加者としての意識だけではなく，それ以外にも活動に影響を与えそうな要因について確認しておく必要があろう。特に企画や運営やそれに関る人間関係には注意を払わなければならない。なぜなら子育てサークルの中には活動の企画や運営の困難が原因で活動が停滞したり解散したりする例も多いからである。そこで，以下ではそれらについて見ていくとともに，もう一人の子育ての担い手である子どもの父親がサークル活動をどのように受けとめていたのかについてもみていこう。

7−1　企画と運営

Zサークルは，活動の企画や運営に関しての詳細な規約はない。リーダーは存在するが，企画や運営はお世話役によって進められる。リーダーは，サークルとしての対外的な対応や，サークルの広報誌，さらにWeb上に立ち上げた掲示板の管理などが主な役割である。何をするかについても，リーダーは相談にのる程度であり，お世話役が一切の責任を持っている。

そのためか世話役の経験を，「大変だった」こととして受けとめているものも多い。サークル

表12　サークルでの嫌な経験

	嫌な経験	その内容
A	思いつかない	
B	あまりない	子ども同士のトラブル。
C	まったくない	
D	多少ある	サークルのすすめ方などで，異議があった。
E	あまりない	
F	あまりない	
G	あまりない	
H	ある	親同士の関係が。結構グループが出来ちゃって，なかなかそこに入れない。子ども同士でも比べちゃうとか。
I	ある	お世話役の人がドタキャンしたりとか，それが続いてかなりいやな思いをした。
J	まったくない	
K	ある	親同士の運営上のトラブル。
L	あまりない	
M	多少ある	企画とリーダーの関係があって，せっかく決めたのにうまく行かなかったりとか。
N	多少ある	親同士の関係。子ども同士はお互いだけど，(それでも)自分の子どものやりすぎは気になった。サークルのやり繰り（会計）のこと。

で嫌な思いをしたことがあるかという問いに対して，運営上のトラブルと答えたものが何名かみられる(表12)。それは企画の準備段階でお世話役同士や，アドバイス役のリーダーと，息が合わないことや価値観が異なっていたために生じた問題であったようだ。また，それには財政的な問題も絡んでいる。会を運営して行くためには少なからず費用がかかる。Zサークルでは定期的な会費の徴収は行っていない。必要に応じ，毎回の活動ごとに参加した者で均等に負担することになっている。特に講習会やイベント的な活動の場合には会場費だけではなく，講師の謝金なども必要である。通常の定例の集まりであっても，公共の施設を使用する際には，ほとんどの場合，使用料がかかる。お世話役はそれについても配慮した活動を企画しなければならず，アイディアや行動力が求められる。金銭的な助成は受けていないZサークルでは，行政をはじめとする外部の社会資源を上手く活用してきた。例えば，サークル結成まもなくに行われた，離乳食の講習会などは保健センターの協力を得て，場所と講師を提供してもらっている。また，参加者に好評であった，「メイク・ネイル・フットケア安らぎ体験」や「子どもの写真のとり方」は，専門学校の協力を得，学生の実習としてボランティアで行ってもらった。これらの企画は，結成当初のリーダーであるKさん[16]がお世話役として進めた企画である。それについてKさんは，母親たちが集まって活動している子育てサークルであるため，予算が少ないことを前面に出して依頼することで，企業等の協力が得やすいことを挙げている。このようにZサークルは公的機関や民間企業などの社会資源を活用することで，メンバーの負担を最小限に抑える工夫をしている。しかしそれでも支出が多くなり，次回のお世話役に不足分が引き継がれることもあったため，不満を感じていたものもいた。

またこれらの活動を企画したKさんによれば，この時期，活動の出席者が決まった顔ぶれになりつつあったため，皆が楽しめるような活動を企画することで，欠席者を減らしたいとの意図があったという。それらの活動は，参加者も多く，メンバーの話を聞いても非常に満足度が高いものであった。だが一方で「とてもよかったんですけど，あれは誰にでも出来る企画じゃないですよね」「普通の主婦には出来ないこと」という評価があった。つまり活動に対しては高い評価を持つものの，それはリーダーのKさんだから出来ることであり，自分が中心となって企画・運営に加わるのは無理があるというのである。つまり大多数の成員のサークルへの関り方はそれほど積極的なものではなかったようだ。こうしてリーダーと成員との温度差が顕在化してしまうことでKさんはその後企画からもリーダー役からも退くことになった。その結果その後の活動は，公園遊びなどのシンプルなものになっていった。

7−2　第二子の誕生

サークル後期以降の活動がシンプルな方向へ進んだのは，参加者の欲求が変化してきたことや，企画の中心メンバーであったKさんがリーダーから外れたという以外にも理由がある。それは既に述べた第二子の誕生である。

第二子が誕生した場合，当該メンバーや子どもが数ヶ月間の休みを伴うため，参加者が減少する。だが第二子の誕生はそれだけではない影響をもたらす。その1つが母親の動きが制限されることである。2人の子どもを連れてサークルの準備をすることは，1人の子どもを持ち準備する以上に困難である。サークルの企画や運営は，限られた財政の中で行わなければなければならないため，アイディアや行動力などが問われることに加え，母親の動きやすさという物理的な問題が影響している。子どもが1人の時は，1人の子どもにさえ目を配っていれば作業

を進められるが，２人となると，上の子どもの動きに対する配慮が必要なことに加え，乳児である第二子を抱えての作業となる。さらに第二子が増えると，対象年齢が幅広くなってくるため，「何をしたらよいのか」という企画段階での問題も生じる。

「２人目が小さいと無理，２人になると赤ちゃん抱っこしながら片付けたり…。１人だったら赤ちゃんの時期も，成長も一緒，２人目以降はバラバラにうまれてくるから。」（Mさん）

このように，第二子の誕生という問題が，企画や運営を進める上での困難となり，活動が単純なものになって行く。それは結果として参加者が固定化してしまうことをもたらしていたのである。

また，企画を進める上ではすでに見たように，母親同士の関係やその責任の重さのため，嫌な思いをした者も存在していた。そこで次にメンバー同士の関係を確認してみよう。

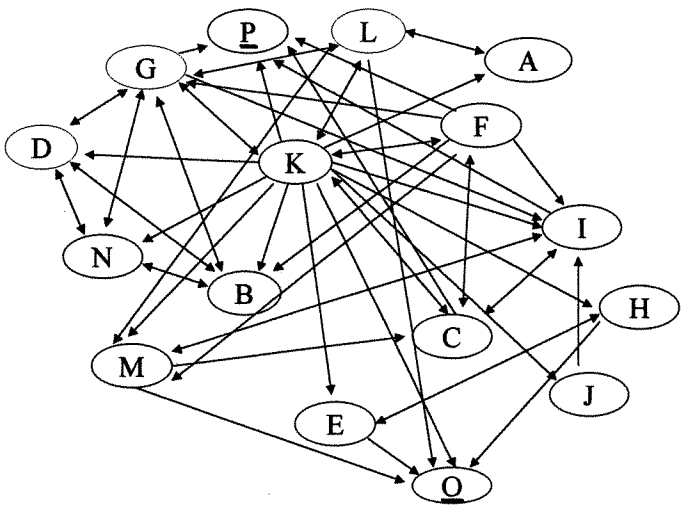
7−3　サークル内のネットワーク

サークル内の交友関係のあり方や，メンバー間の付き合いの深さは，サークルの活動が停滞したり解散するひとつの要因と考えられている。本サークルでも，企画や運営の過程のトラブルがあったのはすでに見たとおりである。では彼らのサークル内の交友関係は如何なるものだったのだろうか。

サークル内の交友関係について「サークルの集まり後，買い物をしたりお茶を飲んだりする人」「サークルのない日，一緒に遊ぶ人」「子どもの預けあいのできる人」「悩みを相談できる人」「電話やメールで連絡をとる人」という項目別に尋ねた[17]。その結果，ほとんどの者がサークルの活動日以外もプライベートで付き合っている事がわかった。特にメールや電話で連絡をとる相手については，幅広い交流が確認された（図１）。

しかし，サークルの集まりの後や，サークルのない日の交友関係をみると，いくつかのグループに分かれていることがわかった。これをみると，サークルが終わった後，一緒に行動する人

図１　電話やメールで連絡



や，サークルがない日に一緒に行動する人については，ほぼ4つのグループに分かれている(図2)。これは，最初に知り合ったメンバー同士が，居住地域ごとの出会いであったため，その影響があるようだ。これらの小グループでは子どもを預けあう関係もみられた。しかし，それは比較的少なく，ごく限られた範囲である(図3)。その理由は，親が近隣にいて必要ない者もいたが，それ以上に「まだ小さいので迷惑になるから」というものである。この「迷惑になるから」という一定の距離間を保つ考え方は，メンバーのインタビューの中でも度々聞くことが出来た。「立ち入りすぎず，よい距離間を保って」というものである。子育てサークルは，子育て支援という目的からすれば，子どもの預けあいなどを積極的に推奨する向きもあるが，現実の母親たちは，親子ともに親しい付き合いがあっても，特別な事情[18]がない限り，子どもを預けあうという関係にはなりにくいようである。必要以上に，深入りはしない，だからこそうまく

図2　一緒に遊ぶ

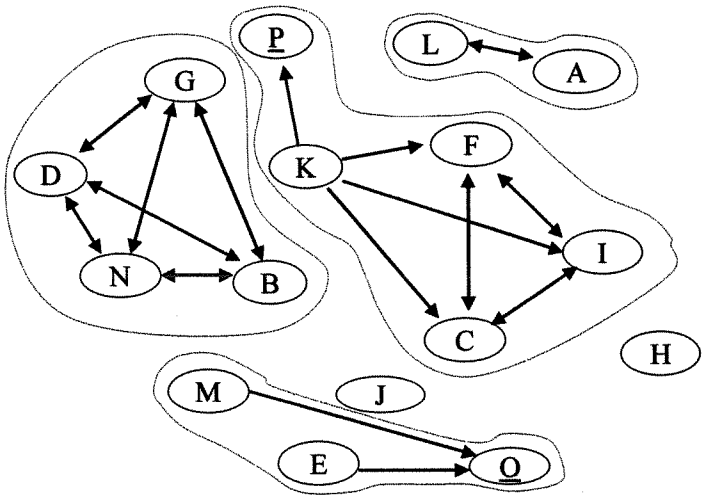
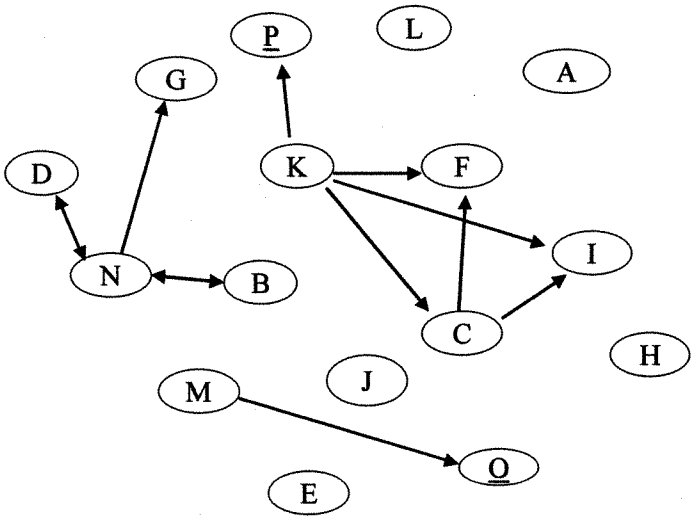


図3　子どもを預けあえる



行くというのが彼らの，交流の一つの特徴といえる。

また，彼らの中にはメンバー間の交流があまり取れていない者も存在している。だが，それらのメンバーの満足度は一様に低いものではない。例えば「サークルのない日一緒に遊ぶ」（図2）「悩みを相談できる」（図4）で孤立しているように見えるJさんは，この図表には現れない元サークルのメンバーと現在でも親しく付き合っている。さらにマンションの子ども会に参加するなど，地域でのネットワークは持っている。そのため，サークルでの活動はその時間を楽しむことと割り切っているため，現メンバーの中に親しく付き合っている人がいなくても，サークルへの評価は比較的高いのである。とはいえ，活動の時に生じる小グループに対しては，多くの者が望ましく思っていない。

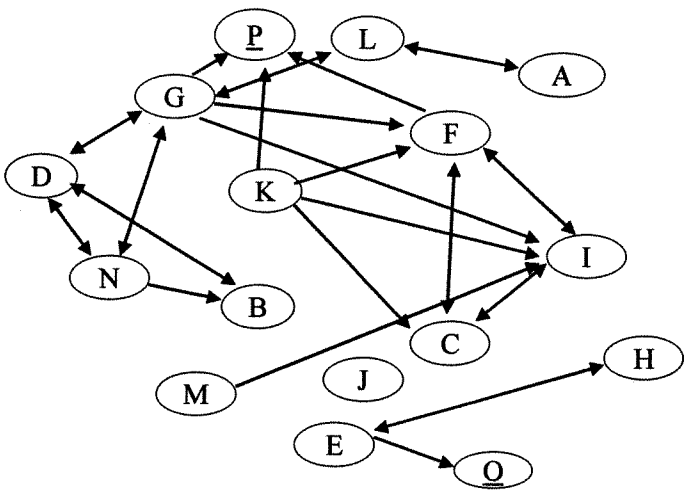
「サークルに来ても，グループとかができちゃう。仲のいい人同士で固まると，話す人が決まっちゃう。もっと気軽に話せると(いい)。最初はそうじゃなかった。じゃあ，こういうグループに分けましょうとか。知らない人同士に分かれて話した。」（Aさん）

このように，小グループで固定化してしまうことが，サークル活動の魅力の低下に繋がるのであり，それは活動や企画のあり方と関連しているという。先に第二子の誕生が参加者の減少や企画の単純化を招いていることを確認した。それを踏まえて考えれば，少人数の公園遊びなどシンプルな活動は，子どもは自由に遊び，母親同士はおしゃべりをする。そのような場面では，自然と親しい者同士で集まることになり，それ以外の者はその輪に入りにくく，輪の中に入れない者はつまらない思いをする。それが続けば小グループの固定化につながる。そのように，単純な活動が小グループでの固定化を促進し，結果としてサークルの活動に魅力を感じず，参加者も同じ顔ぶれになるという悪循環がみられるのである。

7−4　夫のまなざし

妻と子どもが子育てサークルに加入し，活動することについて，子どもの父親である夫はど

図4　悩みを相談できる



のように考えているのだろうか。母親である妻の意思で加入しているサークルであっても，夫の理解のありようによっては，公然とサークルに参加することが出来ないなど，活動に影響が生じる場合もあるだろう。そこで夫の子育てサークルへの関りを聞いてみた（表13）。

その結果，「無関心」とする者はわずかで，多くがサークルの参加に理解を示しているほか，サークルでの子どもの様子を知りたがるという声が聞かれ，父親としてのまなざしが感じられる。しかし，実際にサークルの活動に参加したことのあるものは，4名のみであり，企画の準備などの協力をしてくれると答えた者もそう多くはない。その理由としてもっとも大きいのは夫らの勤務状況である。多くのものは朝早く出勤し，夜遅く帰宅する（表5）。中には子どもが起きているときに触れ合える時間がない者も存在する。そのような中では，希望はあってもサークルに関る機会は得られないだろう。だが，妻がサークルに入ったことで，夫婦の間の会話が増えたなど，その関係に多少なりとも変化があると答えたものは半数を超える。また，夫は妻からサークルに関する話を聞き，場合によってはアドバイスをするという関係もみられるなど，夫とサークルの関係が少なからず存在することが確認された（表13）。これら子育てサークルに対するいわば肯定的な意識は，妻が子育てサークルに関ることを，正当化する役割を持っていただろう。一緒に活動にかかわらずとも，興味を持って話を聞いてくれるだけで，お互いの世界に広がりがもてるという結果を生み出していたと考えられる。

このように多彩な活動を展開していた彼らの活動も，最終的には解散を選択することとなる。

表13　夫とサークル

	妻から見た夫の意識	内容	これまでの夫の関わり
A	理解を示す		参加なし
B	理解を示す		参加なし
C	好意的である	知りたがりもしないが，無関心でもない。	行事に参加・サークルの準備に協力してくれた
D	様子を知りたがる	サークルの話を聞きたがる。	参加なし
E	様子を知りたがる	どんなことしているの？　と聞く。	サークルの行事に参加
F	無関心	否定的ではない。	参加なし
G	理解を示す		参加なし
H	理解を示す		参加なし
I	理解を示す	サークルに入って，自分にも子どもにも友人が出来たことを喜んでいる。	サークルの行事に参加，今は忙しくて…
J	無関心	入っていることは知っている。「ふーん」というくらい。	参加なし
K	無関心	相談にはのってくれる。	サークルの行事に参加
L	理解を示す	話を向ければする。子どもにはいいんじゃないかという。どんどん変ってきているのがわかっているので。	参加なし
M	知りたがる	「楽しんでいるなら，いいんじゃない？」愚痴を言うとそれなら辞めればという。	参加なし
N	理解を示す	ストレス解消になるならいい。	参加なし

次に解散についての経緯を確認するとともに，彼らの解散後の生活を見ることで，サークルが彼らにとってどのような意味を持っていたのかを探ろう。

8．サークル解散とその後の生活

サークルの解散を決定する際は，メンバー全員にアンケートをとり継続か解散かの意思を確認している。それについて尋ねたところ，多くが4月からの生活に変化があることを理由に解散を望んでいた。しかし第二子がいるメンバーには，続けたいと考える者も多かった（表14）。

その結果サークルとしての活動は解散とし，継続を希望した6名は新たなグループとして，年に数回の会合を持つということになった。また，本サークルを契機として結成された英語サークルの方は，リーダーの交代やメンバーの減少などを経て継続する事となった。

表14　サークル存続についての意思

	サークル存続の意思	理由
A	なし	続けたい人だけ，続ければいいと思った。私も，あんまり出席もできなかったし，出席している人がいつも同じメンバーだったから，昔ほど魅力を感じなかったからかもしれない。
B	続けたかった	私自身は続けた方がよいと思ったけど，幼稚園は無理だし，ただ在籍してるだけの人もいるので，ほんとやめたい人もいるかもしれないので，アンケートをとった。それで6人残って，季節ごとに集まろうという事になった。
C	—	—
D	なし（出産の予定があったため）	サークル解散時は，出産予定と重なっていたので，残らないと答えた。本当は3月のサークルの時には生まれる予定だったけど。幼稚園に行くと時間がとれないかと思って。サークルも終わりのほうは，くる人が決まってたんで，続けても仕方ないかと。
E	続けたかった（回数を減らして）	回数を減らして続けたいなと。幼稚園以外にもお友達がいたほうがいいと思って。色んな子と遊べた方がいいから。
F	—	—
G	—	—
H	—	—
I	なし	解散でよいと思った。もう，遊ぶお友達も決まってきていたし，お世話役でトラブルがあって，責任が重くてもういいやと思っていた。サークルで集まっていても話す人は決まっていたので。
J	積極的にはなし	私は4月から入れると決めていたので。せっかく同じくの近くの人と仲良くなってお友達になったので。
K	なし	企画のことでトラブルがあってサークルから少し離れたいと思った。
L	なし	私としては，英語もあるから，大変だろうなって思って，続けないって言う。で，英語のメンバーが皆，Zサークルのメンバーだから，だいたい話をするメンバーが，Zの方にもいるから，わざわざ，そっちで，会わなくても，月3回こっちで会うんだったら。（いいと思った）
M	続けたかった	集まるのは難しいけど，二人目もいるのでやりたいねって。上の子の時もよかったから。
N	どちらでもいいと思った。	どちらでもいいと思った。サークルとしての活動は必要ないと思ったので，保留にしたら，継続になってた。残った人も，どうせ仲よくしているからいいと思って。

※対象者C・F・G・Hは未調査である。

解散後の彼らの近況を尋ねたところ，半数以上の者がこれまでの生活に加え新しい活動をはじめていた。中でも目に付くのは，幼稚園の入園や，その関連のものである。幼稚園が主催する週１～２回，数時間だけの通園をはじめ，地域の公共施設で専門の指導者が行っている幼稚園代替的なプレスクールなどである（表15）。

また第二子を持つメンバーたちは，年に数回，第一子も参加できるように休みや平日の午後に集まりを設けている。少人数のため，これまでに行うことの出来なかった海水浴などを行うなどして親交を続けている。

英語サークルではメンバーの減少に加え，講師の退任という問題があった。そのため新たなリーダーや役員を選出するだけではなく，講師探しや新メンバーの勧誘などをする必要があった。しかしこれまでのノウハウを活かし皆で協力したことで解決できたという。少人数になったこともあり，１人の負担が多くならないよう，無理のない運営を心がけている。活動日に関しては，月曜日から木曜日へと曜日の変更をしたが，頻度は週に１度とこれまで同様であるため，サークルが解散しても英語で一緒のメンバーとは解散前と変わらない程度に顔を合わせている。

また，英語サークルや第二子中心の集まりに参加しているメンバー以外にも，サークル解散

表15　サークル解散後の生活

	解散後の生活	元サークルメンバーとの付き合い
A	英語サークル・プレスクール・読み聞かせ・地域の子育てサークルリーダー	Ｌさんとは子どものプレスクールも一緒なので毎週会っています。
B	プリスクール・第二子サークル・習い事	今でも週１以上合っている。本人同士も，公園で遊んで，お弁当を食べて。
C	第二子サークル・英語サークル・習い事	
D		親しくない人と会わなくなったくらい。
E	幼稚園・第二子サークル・英語サークル	解散後は，夏の海水浴と，カラオケ？　あともう１回くらいです。ファックスやメールとか。 幼稚園の方でも，そんなに遊ぶというのもないので，結構さみしいかな。
F		
G	第二子サークル	
H		
I	英語サークル・音楽教室	Ｆさん，Ｃさんとはしょっちゅう。Ｃさんちの子を遊ばせたりとか。 つかず離れず，ある程度距離をおいて。解散しても，全く変わりないです。Ｍさん，Ｇさんたちとかも，餃子パーティとかしたり，声をかければすぐ集まる。
J	幼稚園・子ども会	その他，マンションの子ども会の役員。特に決めてではなく，ばったり出会って話をしたりとかはある。今のところはあまり頻繁だと，年に１回くらいなら（会いたい）お友達も，そっちになってしまうし，幼稚園の生活が中心になるので。
K	英語サークル・習い事	全員ではないが連絡をとっている。
L	英語サークル・プリスクール・習い事	英語のメンバーが皆，Ｚサークルのメンバーだから，だいたい話をするメンバーが，Ｚの方にもいるから，わざわざ，そっちで，合わなくても，月３回こっちで会う。
M	幼稚園・第二子サークル・英語サークル・習い事	しょっちゅう集まってます。メールで連絡して，カラオケとか飲み会も行きました。
N	第二子サークル・英語サークル・習い事	Ｇさんとは毎日のように会ってました。去年の夏は，毎日外。公園で食べるとかして，別に作ってたんですけど。リトミックも岡本さんと一緒。ほったらかしにできる公園。Ｂさんちの向かいの公園とか。

後の付き合いについて，変わったという意識を持たない者が多い。その背景にあるのは，彼らのインフォーマルレベルでの付き合いである。昨年の夏は毎日のように遊びをともにしてきたという例や，自宅に集まって一緒に食事をとったりすることも，多くのメンバー間で行われている。それは先にみた小グループが中心となっているが，必ずしも排他的なものではなく，行われる内容によっては小グループの枠を超えて広く声をかけているという。

「Fさん，Cさんとはしょっちゅう。Cさんちの子を遊ばせたりとか。解散しても，全く変わりないです。Mさん，Gさんたちとかも，餃子パーティとかしたり，声をかければすぐ集まります。」（Iさん）

このようにZサークルでは，サークルとしての実態はなくなったものの，解散後の第二子グループや英語サークル，さらに個人的なネットワークとしてその付き合いが解散後も生き続けているのである。

また，注目すべき点として，彼らの新境地での活躍がある。多くのものは，父母会などの役員や，地域の子育てサークルのリーダーなどを引き受けている。「誰もやる人がいなかったから」「頼まれて，仕方なく」など，引き受けた理由は様々であるが，積極的な活動をしている。

それについて，Bさんは，「みんな(サークルのメンバー)，頼まれれば嫌といえない人たち」と表現しているが，単にパーソナリティだけではなく，これまでの様々な活動が，それを作ったといえるのではないだろうか。

解散の半年前に行ったインタビューで，サークルに対する評価をしてもらったところ，高い評価をするものが多かった。その内容としては，「子どもの友人ができたこと」や「子どもの遊び」のように子どもに関する活動について満足しているほか，「母親同士のネットワークが広

表16　サークルの評価

	母親の友人関係	育児の知識・情報	子ども友人	子どもの遊び	悩みの解消	その他
A	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	
B	満足	満足	満足	満足	満足	
C	満足	満足	満足	満足	ほぼ満足	
D	満足	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	わからない	同じ地域で友だちが増え，情報も入りやすい。
E	ほぼ満足	満足	満足	満足	満足	
F	満足	満足	満足	満足	ほぼ満足	お世話役の経験は自分のためになった。
G	満足	ほぼ満足	満足	ほぼ満足	わからない	
H	やや不満	ほぼ満足	ほぼ満足	満足	わからない	子ども同士の間で，物の取り合いとか，争う経験ができた。
I	ほぼ満足	ほぼ満足	満足	満足	ほぼ満足	全部ではないが満足している。
J	ほぼ満足	ほぼ満足	満足	満足	ほぼ満足	家から外へ出る機会が増え，子どもの友人の幅が広がったこと。自分自身も活動が外に向いていった。
K	満足	満足	満足	満足	満足	
L	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	ほぼ満足	
M	満足	満足	満足	ほぼ満足	ほぼ満足	情報が入ってくるのがよかった。
N	満足	ほぼ満足	満足	満足	ほぼ満足	親同士が知り合うきっかけ。

がった」ことと，「育児の知識や情報が得られた」ことがある。特に母親同士のネットワークが広がったことについては，ほとんどの者がそう答えている。それは解散後のインタビューでも変わっていない（表16)。

「親としての知識を（得たい)，１人目だから全然知らないこととか（中略）いろんな情報が得られたという意味では，親にとってはよかったかな。」（Ｌさん）

「家の近くでお友達ができたことかな。私自体が話せるお友達が出来て，親子とも免疫が出来た。外に出る機会が少ないじゃないですかぁ。冬になると特に足が遠のく。前はＨ地区に住んでいたんですけど，仕事をしていたけど，友達がなく，サロンがある自体知らなかったので。」（Ｊさん）

これら「育児の知識や情報…」や「母親同士のネットワーク…」などに代表されるいわばサークルでのプラスの経験は，サークルの総合的な評価に影響を与えていると考えられる。サークルでの人間関係に嫌な思いをした経験を持つ者も，総合的な評価は高く，嫌な経験自体についてもポジティブに捉えているのである。

「その時はかなり落ち込んだりしたけど，その経験を生かして，違うことが出来ると思います」（Ｋさん）

「結局いい経験だったと思います。無駄なことだとは思っていません。」（Ｉさん）

このように，「その時は落ち込んだ」が，それをプラスに捉えられたのは，サークルで得られた他のメリットがあったためだろう。そしてサークルに参加したからこそ得られた経験は，今後の生活に生かされると考えているのである。

9．まとめ

これまで見てきたように，子育てサークル加入の目的には「子どものため」と「親のため」という２つの欲求があり，サークルの活動はそれに沿って行われていた。だがその欲求は，子どもの年齢や母親の生活状況に応じて変化していたといえる。サークルの解散に関する要因を検討すると，解散には子ども親それぞれの，サークルへの欲求が低下したことが根本的な要因として存在していた。だが，それは単一な問題ではない。欲求が変化しているという背後には，最初に提示した３つの視点を含む様々な要因が影響しているからである。それらを親子別に整理してみよう。まず子どもに関するものとしては，①子どもの成長によって出来ることや，親が子どもに体験させたいことが変化している。②それに合わせて企画も変化していることがある。

次に親に関するものは，③子どもの成長に伴って母親の人間関係を含めた生活環境が変化する。④子どもの成長に伴って子育ての不安が変化する。⑤サークルへの参加期間が長くなるとともに，仲間関係が変化する。⑥何をしたいか，何が出来るかがリーダーを含めたメンバーで

異なる。それには⑦第二子の有無も影響している。

以上のように子育てサークルの解散要因は，親それぞれのサークルへの欲求が低下したことが根本的な要因としてあり，そこに先にみたような要因が複合的に作用しあっている結果として，サークルが解散に至っていると見ることができる。

それでは次に成員にとってサークルの解散はどのような意味を持っていたのだろうか。サークルの解散に関する要因を見る限りでは，どちらかといえばネガティブな評価が目立ってしまった。しかし，彼らの解散後の生活や意識をみるとそれとは異なる見方ができる。それは，①以前から親しかった人とは変わらず付き合いが行われており，②時に小グループの枠を超えている。③サークル活動を高く評価している。④新たなステージで活躍しはじめた者も少なくない。つまり，サークルにおける経験には望ましくないものもあったが，得られたものも多いと感じ，それを今後に生かせると考えているのである。

これらのことからZサークルの解散の意味を考えると，単なる活動のあり方に問題が生じた為の解散としてネガティブに捉えるよりも，当初の目的を達成し，個人がエンパワーメント[19](國信　2002)したための解散であり，いわば発展的な解消としての解散であると言えるのではないだろうか。つまり子育てサークルは次のステップへと繋がるいわばプライマリーな経験を与えてくれた場であったといえよう。

現代の社会において子育てサークルはこれからも生まれては消える存在であるだろう。しかし数年の経験でも彼らが得たものは大きく，その存在価値が高いことを考えればさらに様々な視点からの研究が求められるところである。

＜注＞

1) エンゼルプランとは，政府が少子化対策として，1994年12月に策定した「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」の通称である。それを基に「緊急保育対策等5ヵ年事業」「地方版エンゼルプラン」の取り組みがなされ，1999年12月には，それを見直し「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」（新エンゼルプラン）が策定されている。

2) 子育て中の親子が共同で遊びや学習をしている小集団の名称については「子育てサークル」の他にも，「子育てグループ」「育児グループ」「育児サークル」という表現があるが，ここでは公的にも使用されている「子育てサークル」を使う。また文中で使用する「サークル」は「子育てサークル」の略称として使用する。

3) 結城の研究は直接サークルの解散を議論したものではないが，サークルに対するネガティブな意識は，サークルの解散に繋がると考えられるためその一つとした（結城　2001)。

4) 住田らはサークルへの母親の参加目的とサークル活動の効果に関連を見出している。子育てサークルの場合，参加単位は母親個人ではなく，母親と子どもという母子単位である。そのため母親が自分の個人的な関心や欲求のために参加する場合も，母親が子どものために参加する場合もあると述べている(住田・溝田　2000)。

5) 子どもは発達段階によって出来る遊びが異なる。母親と子どもを対象とした子育てサークルの活動を考える場合は，子どもの年齢層に合わせて企画することが多い。

6) 平成12年のサークル形成数が無いのは，この年から保健センターが子育てサークルづくりの支援から手を引いたからである。それ以降サークルづくりに関する事業は，子育て推進課（現子育て支援担当課）に一本化された。札幌市保健福祉局保健衛生部地域保健課資料並びに，S区保健センター保健師に対する聞き取りによる。

7) 地域子育て支援センター事業では，事業の中で子どもや親に対する保育や指導を行う者について，指導員という名称を用いている。

8) 「子育てサロン」は，週に1度，地域の児童会館で親子あそびや子育て家庭同士の交流の場を提供している。児童会館のホールを活用し，体操や読み聞かせ，ブロックなどの遊具で遊べるコーナーを用意するなど，参

加者が好きな場所で自由に遊べる形態になっている。事前の申し込みや，参加回数に制限がないために，自分の都合に合わせて参加することができる。

[9] 事業の転換にはいくつかの理由がある。その一つは一部の参加者の声であった。遊びの広場に参加することが，サークルへの加入に結びつくことに対する不満である。その意見の背景には，遊びの場はほしいが，運営など責任を伴うことは避けたいとする意識があると市の関係者はみている。札幌市子育て支援担当課に対する聞き取りによる。

[10] 全国で活動する子育てサークルの数は，厚生労働省でも把握していない。だが子育てサークルの先駆的な地域である関西で活動する「こころの子育てインターねっと関西」によれば，1997年当時関西2府4件で800あまりである。だが子育て支援事業が本格的にスタートした1997年の札幌市の子育てサークルは，把握されているだけで146サークル，その翌年には511サークルに急増している。このことからも，札幌の子育てサークルが高い比率で存在していることがわかる。

[11] 札幌市子育て支援担当課の協力で，2000年12月現在存在していたサークルが2003年9月現在活動しているかについて調べてもらった。

[12] 大多数が結成時から加入している中で，既存のメンバーの紹介による中途加入も数名ほどではあるが存在する。

[13] 子育てサークルの中には，運営は自分たちでするが，活動の内容は専門の保育者に依頼し行う，いわゆる幼児教室的なタイプのサークルもある。

[14] ここでいうプロとは，保健センターに所属する保健師や栄養士，歯科衛生士，地域子育て支援センターの保育士などである。

[15] 遊びといっても，2歳児の場合，共同で行うルールのある遊びはまだ出来ない。パーテン（parten 1932）の遊びの類型でいう平行遊び（同じ空間で隣同士にいて，それぞれが遊んでいる）のような遊びが中心である。

[16] Kさんは，両親と弟一人の4人家族で育った。大学卒業後，広告代理店や市場調査の仕事に就いていた。結婚後も仕事を続けていたが，妊娠を契機に退職した。主婦専業となってからは，マタニティエクササイズや英会話，ゴスペル，ダンススクールなど多様な活動に参加した経験を持つ。

[17] この結果は2002年9月の調査にもとづいている。また，図1～図4のO，Pは，未調査の成員である。

[18] 第二子の出産で母親の体調が思わしくないなど，単なる私的な都合とは異なるものについては，日中その子どもをみてあげるというようなことが一部のメンバー間で行われていた。

[19] 「エンパワーメント」という言葉は，國信に習い「社会的に自立するための多様な能力を個人の精神的な内面からつけていくこと・自ら獲得していく内面的な力」（國信　2002：259-77）と定義する。国連の第3回ナイロビ世界女性会議以降，女性の生涯学習のキーワードとして使われるようになった。

[文献]

藤本明美，2003，「子育てサークルのチカラ」津止正敏・藤本明美・斎藤真緒編『子育てサークル共同のチカラ』文理閣 12-59.

原田正文・福井聖子・服部祥子，2002，「現代日本における子育て支援方策に関する研究（第Ⅰ報）── 関西地域における『子育てサークル』に関する統計的調査 ──」『大阪人間科学大学紀要』1：69-74.

原田正文，1999，『みんな「未熟な親」なんだ ── グループ子育てのすすめ ──』農文協.

木脇奈智子，1998，「子育てネットワークに関する考察 ── 子育てサークルの類型と今日的課題 ──」日本家政学会家族関係部会編『家族関係学』17：13-22.

小木美代子，2000，「1980年代後半から顕在化する新しい子育て・子育ちグループの誕生とその背景」，小木美代子・立柳聡・深作拓郎編著『子育て学へのアプローチ』エイデル研究所 38-51.

國信潤子，2002，「動き出したグローバルネットワーク」岩崎久美子・中野洋恵編著『私らしい生きかたを求めて ── 女性と生涯学習 ──』玉川大学出版部 259-77.

厚生省，1998，『厚生白書（平成10年版）』.

増山均，1992，『子育て新時代の地域ネットワーク』大月書店.

松田茂樹，2001，「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』52(1)：33-49.

大野曜編，2001，『子育てサークル活動に関する調査報告書』（文部科学省委嘱事業「家庭教育に関する活性化方策の推進」事業報告書）子育てサークル研究会．

佐藤慶幸，1982，「ヴォランタリー・アソシエーションの研究史」『アソシエーションの社会学』早稲田大学出版部 21-64．

汐見稔幸，2001，「少子化社会の子育てのゆくえ――広がる子育てサークル――」『国立女性教育会館研究紀要』5：129-38．

住田正樹・溝田めぐみ，2000，「母親の育児不安と育児サークル」『九州大学大学院教育学研究紀要』3：23-43．

山本理絵，1997，「親と子の自己実現」棚橋昌子・白石淑江編著『親と子のメンタルヘルス』中央法規 82-110．

矢澤澄子・国広陽子・天童睦子，2003，「若い母親の『母アイデンティティ』」矢澤澄子・国広陽子・天童睦子『都市環境と子育て』勁草書房 171-201．

結城恵，2001，「メンバーのサークルの関わり方とサークル活動への評価――子育てサークル活性化のために――」『国立女性教育会館研究紀要』5：109-18．

渡辺芳，2000，「地域社会における新しい集団形成」高橋勇悦・大坪省三編著『社会変動と地域社会の展開』学文社 35-51．